

# 海外の島国へ行って 起きた知人女性 とのパンツの恋 運命的な崖の上

先日、出張のため東京へ行った。

久しぶりに行った都会。

煌びやかな夜の街を楽しみつつ数日間  
過ごす。

美人ママとお酒を飲み、夜のスナックで  
出会った知人と住む街へ戻ってもしば  
らくLINEでやりとりしていると・・・。

半年後彼が海外へ一人絵画の勉強へ行ったと連絡が入る。

かねてからずっと絵画がやりたかったらしくはじめて一年と少し。

その国を選んだのは生で見ればこそそのたくさんの絶景がその国にはあり、尊敬

できる先輩画家が一人その国にいたかららしい。

「へえーっ……」

俺はシャワーを浴びながら考えていた。

一人で渡航なんて・・・・・・・・。

玄関には夏らしい薄い青色のスリッパ  
が無造作に置かれている・・・・・・・・。

・・・・・・・・。

毎日の生活には充実もないわけではないが、ありふれた忙しい日々。

俺は同じく知人のお尻の小さな黒まつ毛の女子と何か一つでも何か前進したいと一緒に海外へ行くことに決めた。

ちなみに彼女はずっと知り合いの友人である。名前はリナエ。

裸のベッドの上・・・・・チカチカ蛍光灯  
を消して・・・・・その夜も朝まで。

その後俺はリナエとLINE、賛成し合  
って自分なりにどこへ行くかなどを調  
べてパスポートを取った。思い立ってか  
らそれほど期日はかからなかった。

俺たちは北の方の国を選んだ。

計画と賛成後・・・・・・・・シャワールーム  
へ一緒に入っていた女子のリナエがそ  
の国がいいと勧めたのだ。

ずっと・・・・・・・・下着は無造作に浴室前の  
洗濯籠に投げ捨てられている。

「・・・・でもさ、あの国の方がよくない？」

リナエはハダカの太ももと膝をモジモジさせた。

検索窓に文字を入れるとすぐにヒット。

情報社会の今では何事にもそれほど時間がかからない。

その北の国は有名な歴史由緒のあるカルデラがあるらしい・・・・・・・・。隣国へ行った知人と同様に日本からすぐ近くである。

・・・・・・・・昔そこは火山地帯だったようだ。

その後争いのようなものがあり、街の数々が一時的に壊滅したという経緯。それが今から100年ほど前のこと。

彼女の太ももを吸う。

彼女はお尻を突きだした。

(体験版は以上になります。ご読了ありがとうございました)